

東邦大学学術リポジトリ

Toho University Academic Repository

タイトル	A会に属する日本からの英国永住者の老年期の慢性障害に備える健康の視点：機関紙を用いた予備的研究
別タイトル	Health views on preparing for chronic geriatric disorders held by permanent UK residents from Japan belonging to peer support group A : Pilot study based on group newsletters
作成者（著者）	高橋, 良幸
公開者	FD 委員会 研究推進検討会 (東邦大学健康科学部)
発行日	2019.12.01
ISSN	24343838
掲載情報	東邦大学健康科学ジャーナル. 2. p.11 19.
資料種別	学術雑誌論文
内容記述	報告
著者版フラグ	publisher
メタデータのURL	https://mylibrary.toho u.ac.jp/webopac/TD33456113

A会に属する日本からの英国永住者の老年期の慢性障害に備える健康の視点

—機関紙を用いた予備的研究—

高橋 良幸

本研究は、A会に属する日本からの英国永住者の慢性障害に備える健康の視点について明らかにすることを目的とした。老年期の課題に共に取り組むA会の15の機関紙から質的に分析した。結果、健康の視点は、英国で老いることの思いに端を発し、英国で身につけた気概を基盤に自己保全と老いへの自己対処といった英国で培ってきた個人の力による対処の側面と、英国での安心の老後環境のイメージを基盤に会の目指す方向と会の役割の醸成という会の力による対処の側面で行き届くとするものであった。自己の保全、自己対処は高齢者に普遍的な健康の視点と考えられた。安心の老後環境には、日本とつながれるものが重要であり複数文化を経験する者に特徴的と思われた。老年期にはホスト文化と自文化の両立に再度焦点が当てられると思われ、英国で身につけた気概と自文化との両立に着目して個人と共同体に働きかけることができるコミュニティの確立が望まれる。

キーワード 健康の視点 高齢者 慢性障害 英国 永住者

1. 序文

第二次世界大戦後、日本では国際化に伴い、多くの者が海外に在留するようになった。グレートブリテン及び北アイルランド連合王国（以下、英国）もその一つである。

日本から英国への在留邦人の増加は第二次世界大戦後に盛んになった（Ito, 2001）。在留は、帰国の予定・意志の有無によって、長期在留者と永住者とに分けられるが、日本からの英国永住者は平成27年で67,000人を超える。これは日本からの世界各国への永住者数順位で第4位となる（外務省領事局政策課, 2016）。

戦後の英国への海外在留は明治時代に行われた集団移住とは異なり、学生としてや、あるいは仕事で移り住んでいるケースが多い（金本, 2014）。そのため一つの地域に集団で暮らしているケースは少ない。そして、永住者は英国人との婚姻も日本人同士の婚姻もある。英国籍を取得する者もいれば、永住権のみで生活している者もあり様ではない。

海外の在留邦人には、日本における長寿高齢化と同じように、高齢化が迫っている。高齢化の問題は、配偶者との死別や、病気の罹患、慢性的な障害の発生などがあるが、複数の文化を経

験している者の場合、多数の文化的要素が絡み合った老いの過程をたどるとされている（金本, 2009）。例えば、老化に伴う認知能力の低下によって習得した永住先の国の言語が話しにくくなり、母国語に戻るといった経験である（Treas, 2002; Treas, 2015）。

他国への移住を他の文化への適応の過程と見てしまえば、母国語への回帰は、適応の後退として捉えられてしまうが、金本（2009）は、複数の文化を経験する者の長期に渡る異文化への適応の過程は、ホスト文化への一方的な同化の過程ではなく、自文化を両立させた過程であり、老いと共にそこに回帰していく過程を含んでいることを指摘している。

筆者は、このような複数の文化を経験する高齢者が慢性の病・障害に備えながら生活を継続していくことについて、自国で老いる高齢者とは別な健康の観点でみる必要やケアシステムの課題があると考えている。

英国に住む日本人への高齢化に関する意識調査では、回答者の7割が60歳以上で約85%が女性という集団であったが、約20%の者が英語を話す・読む・聞く・書くことが億劫になってきており、約30%の者が日本食への傾向が強くなり、43%

は終の棲家をどこにするかは決めていないと答えた。老後の一番の不安は、上位から、身の回りの世話ができなくなること、病気、認知症、高齢者施設での生活であった。イギリスで希望するサービスは日本語、日本食中心の高齢者施設を準備してほしいとした者が40%いた(金本, 2014)。この結果から複数の文化を経験する者が永住先の国において老いることは、老年期の身体的認知的問題に伴う健康の諸問題に立ちあいながら、アイデンティティの不安定さと共に生きていく過程なのかもしれないと筆者は考えた。そこには独自の健康の視点があると推察した。

レイニンガー(1995)は、人々から得られた文化ケアの知識が、その文化に適したケアをするうえでもっとも正しい知識基盤となるとして重要視している。つまり、その当事者達からの情報がなによりも最初の知識になるということである。

日本から海外に戦後永住した者の老年期の課題および文化に即したケアについての研究は未だ不十分である。他方で、諸外国から日本に永住する高齢者の研究はいくつかある。文化を尊重したデイサービスを受ける在日コリアン高齢者一世を対象にデイサービスの意味を明らかにした西田(2013)は、文化を尊重したデイサービスとは「人生で身につけてきたつながりを感じているものを共有できる他者がいて、ありのままの自分としてこれまでの道のりや大事にしているものを表出できる場」であることを述べている。本研究の複数の文化を経験した者の老いという意味では、共通部分があると思われるが、国や永住に至るプロセスが異なるので単純には比較できないと言える。

日本人の高齢者の健康について正木(2008)は、日本国内の文献検討から、高齢者の健康を捉えるための文化的視点を明らかにしている。そこでは、高齢者側の健康の視点として【大いなるものの感受】【人との関わり】【自己実現】【健康・経済の安定】が明らかになっている。複数の文化を経験する高齢者にも同様のことが言えるか研究が必要と言える。

これらの研究状況を鑑み、本研究では、複数の文化を経験している高齢者の健康を支援すると

いう立場から、日本から英国に永住した者が、慢性障害が生じる老年期を豊かに過ごすためにどのように考え取り組んでいるのか、彼らの健康の視点を明らかにしたいと考えた。

本研究が明らかになることで、日本から英国に永住する高齢者のケアについて示唆が得られると考える。また、海外に在留する者の老いの課題は、英国以外の永住者にも同様のことが言えるかもしれない。また、他国から日本に在留している永住者にも同様の課題がある可能性がある。その意味で本研究は、複数の文化を経験する者の老いをどのようにケアしていくかについて一つの参考資料になると考える。

慢性障害への備えは、国の社会保障制度と密接に関連する。英国では一定期間滞在する者はNational Health Service (NHS) への加入と保険料の支払いが義務付けられ、それによりNHSから無償で医療を受けることができる。介護サービスは、永住権を有する者は自治体から介護を受けられることになる(独立行政法人労働政策研究・研修機構, 2015)。介護サービスの中で看護ケアの部分は医療にあたり無料で受けることができる(伊藤, 2016)。

このような社会保障制度の中で、日本からの英国永住者は、老年期に慢性障害を有した場合、英国で介護サービスを受給できるが、他国からの移民が介護の担い手となるケースも多く、より自分たちの文化に即したケアが受けられるように体制づくりをしている日本人会がある。日本人会は複数存在し、英国在留者数と最大規模の日本人会の登録者数から推定して6分の1の者はなんらかの日本人会に登録していると推定される(英国日本人会, 2019)。以上から、永住先で老いる者の健康の視点には、個人の視点だけでは捉えられず、共同体による視点も包含して捉える必要があると考えた。そこで本研究は、英国の中で老年期の課題に共に取り組もうとしている日本人会(以降、A会)の会員からその健康の視点を明らかにしようと考えた。しかしながら、A会の会員は多くの研究対象となり多忙である。そのため、本研究ではA会が発行する機関紙から健康の視点を明らかに

する予備的研究を最初実施することにした。本邦はその予備的研究の報告である。

本研究では、用語の混乱を避けるために、日本人として生まれ英国に移り住み現在永住している者を「日本からの英国永住者」または単に「英国永住者」と呼ぶ。国籍は問わない。「健康の視点」とは個人または共同体が、健康のために考えていること、実際に取り組んでいること、これから取り組もうとしていることを含んだ健康に関する意識の総体、と操作的に定義した。「慢性障害」とは、認知機能の低下や、脳卒中による運動機能障害、感覚機能障害、糖尿病や癌などによる各種臓器の機能障害を想定している。

II. 研究目的

本研究の目的は、A会に属する日本からの英国永住者が、慢性障害が生じる老年期を豊かに過ごすためにどのように考え取り組んでいるのか、彼らの健康の視点を明らかにすることである。

III. 方法

本研究は健康の視点を明らかにするため、質的研究デザインを用いる。データはA会が発行する機関紙の記載内容から抽出した。機関紙は初号から2017年までを対象とした。機関紙の入手および利用においては、A会の会長に本研究の目的と方法を説明し許諾を得た。機関紙から老年期の慢性障害に備える健康についての会員の考えや取り組みが記載されている部分を抜き出し元データとした。なおA会の機関紙から読み取ることができる投稿者の年齢層は、50歳台も含まれるが、多くは60歳以上である。共同体による取り組みも包含するため会長などの役割を持った者も他の会員と分けずに取り扱った。

データは質的統合法 (KJ法) を用いて分析した。山浦 (2017) は、クラシックGTと川喜田のKJ法と質的統合法 (KJ法) を比較し、質的統合法 (KJ法) は、普遍性・一般性につながる対象の「論理」が浮かび上がるとともに、個性・独自性につながる対象の「固有性」も浮かび上がる技法であると述べている。それ故、英国で永住することの経験

がより鮮明に浮かび上がると考えたからである。

本研究は、千葉大学大学院看護学研究科の倫理審査委員会の承認を得て行った (承認番号29-61)。

分析結果の妥当性を確保するために、得られた結果についてA会の会長に内容が妥当だと考えられるか確認をとり、指摘事項について再度元データに戻り点検をし、必要に応じて修正を行った。研究期間は2017年11月から2018年3月までである。

IV. 結果

A会によって2010年から2017年に発行された約30部の機関紙のうち15部が分析対象となった。機関紙はすべて日本語で記載されていた。約半数が入手困難であった理由は、会長の交代によって機関紙が残されていなかったためである。A会は英国でポジティブな老後を送るために、施設ケアや老年期の問題、英国での健康診断の受診方法など様々な情報発信も行っている。会員からの思いや考えがコラムに綴られている。また、A会では高齢会員を対象にデイケアを実施している。

データ量は82ラベルとなり、グループ編成を10段階経て7つの最終ラベルとなった。最終ラベルを説明がつく妥当な位置に配置し空間配置図とし、最終ラベルの内容を端的に表すシンボルマークを付した (図1参照)。シンボルマークとは項目と内容で表現される。

以下、A会に属する英国永住者の老年期の慢性障害に備える健康の視点について説明する。なお、シンボルマークの項目および内容は**ゴシック体**で表記する。最終ラベルは〈 〉で表し、元ラベルは「 」で表すこととする。

1. 全体の要約結果

A会に属する英国永住者の老年期の慢性障害に備える健康の視点は、**孤独・不安・鬱・死別の悲しみなど心配が伴うものだが英国に住んでいることでそれがより不安定となるものかと思うという老いることへの思いに端を発して、それ故に英国の中で有意味な存在として感じる場と意識をもつという自己の保全と体・心の問題を取り組める内容に転換し実施するという老いへ**

の自己対処を実施していた。これらの自己の保全と老いへの自己対処は、家族・近隣と溶け合い望む生活に近づける経験という英国で身につけた気概が基盤となっていた。他方で自らの健康管理と日本を感じられるケアを受けられることという英国での安心の老後環境のイメージを基盤にして、日本人向けのきめ細やかなケアのネットワーク設計とその実施という会の目指す方向と、日本人ネットを活用した情報交換の活性化と促進という会の役割が醸成されていた。

以下、最終ラベルごとに結果を述べる。

2. 各最終ラベルの結果

1) 【老いることへの思い：孤独・不安・鬱・死別の悲しみなど心配が伴うものだが英国に住んでいることでそれがより不安定となるものかと思う】は、〈老いてのからの人生には、孤独、不安、鬱といった心の不安定さや、死別の悲しみ・死の恐怖は、性や文化に限らず誰にでも起こり、英国の中ではさらに自己否定や入所の不安があり、どのようにしたら心安く過ごせるのか悩みがつきない〉という内容であった。

ある会員は「高齢者が陥りやすい心理面での問題、これは多くあるがトップ3は、1. 孤独、2. 不安、3. 鬱に大別できる」と紹介し、ある会員は「死への

恐怖は非常に大きく、これは、年齢や性別、文化の違いにかかわらず、誰でも持っているものです。そして、失ってしまった愛する人々が、永遠に還ってこないという絶望感と喪失感にも深いものがあり、これもまた私たちに共通のもので」と老年期に共通の課題を綴っている。ある会員は「イギリスでの生活に影響を及ぼしている要素として考慮してみる事柄として、1. 異文化への適応度合い、2. イギリス社会に溶け込んでいるか、3. 中途半端な立場、のために不安定になり易い」と述べ、異文化の中で老いることで助長される不安定さについて述べている。

2) 【英国で身につけた気概：家族・近隣と溶け合い望む生活に近づける経験】は、〈英国で生きる道は、英国の我が家族、近隣住民など周囲の人と繋がり関わって、時に、英国の生活様式を学び、時には日本の文化伝統を伝えていって、自らの望む生活に近づけていくことで開ける〉という内容であった。

英国人男性と結婚した女性会員は「私達の家で年6回から7回ですが、野点とか夜とか時々男性も子供も加わり、お母さん達もはりきります。イギリスに住む子供から伴侶まで日本のカルチャーを知り、味わいながらいつの間にか伝統が受け継がれていけたらまっとうですよ。後略」と英国での生活と溶け込んできた経験を紹介していた。

会長は「B企業と協力することで、彼らの管理の元で、日本食が用意される日本人のためのケアホームが将来生まれることも可能そう。そうなれば孤独な一人住まいへの不安や心配も軽減されるのではないかと思う」と、これまでの英国社会についての知識を踏まえ英国の企業と協力することを模索していた。

3) 【自己の保全：英国の中で有意義な存在として感じる場と意識をもつ】は、〈高齢者が生きがいをもって楽しく幸せに暮らせるには、健康と安心した住まいがあること、仲間をつくって語らい関わりがあること、そして、自分が社会の役に立ち、自己実現でき、有意義な存在として感じられることが鍵となる〉という内容であった。

ある会員は老後の生活体験として「今、ホームレ

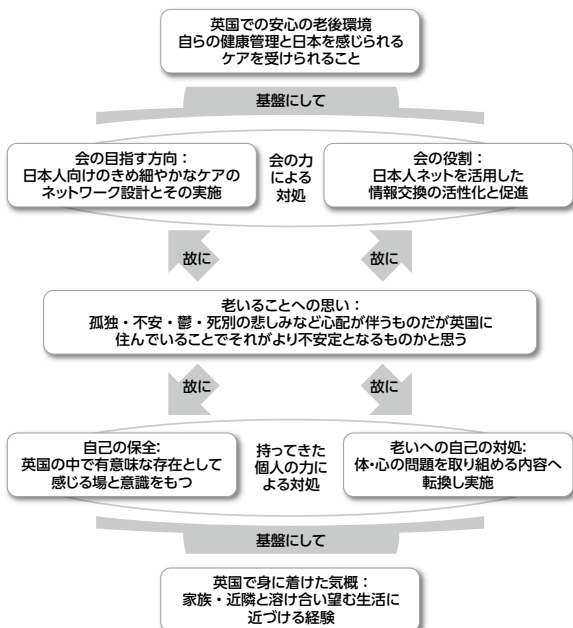


図1：A会に属する日本からの英国永住者の老年期の慢性障害に備える健康の視点

スの人達に奉仕していますが、奉仕がこれ程楽しいとは思いませんでしたし、幸せです。幸せは自分で創り上げていくものと知りました」と綴っている。

ある会員は「孤独への対策は、自分自身と良い関係を持つ。この国は自分を受け入れてくれないだろう等と自分の殻に閉じこもってしまう。そうではなく、自分は価値ある人間で他の人にお役に立てる人間であると思うようにする」と自己の保全方法について述べている。

4) 【老いへの自己対処：体・心の問題を取り組める内容に転換し実施する】

これは、〈体の不自由さ、心の健康、終の住処、臭い、ファッションといった老いの問題は、死に関係することであれば遺言書やエンディングノート準備、健康問題では医療の確保と自己管理、臭いやファッションであれば周りに気を遣い律していくとか、終の住処のことではあらゆることを検討しサービスを確保するなど、取り組めることに転換していつて行えることは行っていくことが安心の道につながる〉という内容であった。

ある会員は「老いるにつれて生じる様々な問題を自然現象と受け止めがならも今を楽しく生きる『出来るだけのことをする』という哲学が必要だ」と心構えを述べ、会長は「老いると、頑固、身勝手、不機嫌、うつ病など、体の不自由さに伴って、あらゆる共通の問題が生じてくる。だからこそ、今、元気なうちに、毎日をフルに生き、ポジティブな老後計画を打ち立てていきたいと私は願っている」と述べ、ある会員は、「セキュリティは健康管理と同様で1. 自己管理を怠らない（暴飲暴食しない、うがいの励行）、2. 健康診断などで早期発見、良き医師の開拓、3. 医療保険への加入、と置き換えてみると分り易く、安心の確保に他ならない」と老いに伴う障害への備えについて述べている。ある会員は講演を受け「老人介護産業もひとつのサービス産業なので、顧客ニーズを把握し、それに答えることが必要なはず。日本に住んでいても和食一辺倒ではないわけで、それと同様に、この国でもトーストかお茶漬けかの選択ができることが望ましい、とにかく自分の五感を使い、しっかり質問して、積極的に選択することが大切」と同胞に訴えかけていた。

5) 【英国での安心の老後環境：自らの健康管理と日本を感じられるケアを受けられること】

これは、〈異国において老後に心が元気で、障害があっても健やかで安心が得られる環境は、自らの健康管理と、日本食、日本語、風呂やテレビなどの日本文化といった母国の慣れ親しんだものに触れられることであり、日本人によるケアホームやケアがその一役を担うことができる〉という内容であった。

ある会員は友人を間近で亡くし「(前略) 命のはかなさと、老いて一人で住んでいた悲しみをしみじみと感じさせられました。その時何よりも日本人のネットワークの必要性を強く感じました」と述べ、ある会員は「孤独への対策は、人とできるだけ接するよう勧める、日本文化にできるだけ接するようにする、例えば会に参加したり、県人会などで出身地の食べ物、読み物、文化に触れる。インターネットで懐かしのTV番組、音楽、趣味に接し、それを大切な事と思う」と日本文化に触れ元気を保つ方法を述べている。

あるワーキンググループメンバーは「この会は、いよいよ身の自由が利かなくなってもイギリスのケアホームではたして大丈夫なのかと懸念する人々の集まりで、試行錯誤で老後のケアを考えています。最終的には日本食と日本語環境(日本人ケアラー)のケアホームの建設を目指しています」と述べている。

6) 【会の目指す方向：日本人向けのきめ細やかなケアのネットワーク設計とその実施】

これは〈英国で暮らす日本人高齢者を支える仕組みとして、近年英国でも高齢者が参加できるコミュニティづくりの再設計が謳われているように、日本人向けの日本食サービス、相談ネットワーク、地域サービスといった心の拠り所となるきめ細かいサービスのネットワークをつくることに必要性を感じ会の発足以来目指している〉という内容である。

会長は「英国では、高齢者が参加できるコミュニティの再設計の取り組みが急がれているという報告がある」と英国自体が抱える高齢化社会の問題を発信している。そして、施設設立のワーキンググループメンバーは「会のメンバーに提供す

るサービスを拡充することです。会員の切実な問題が生じた時の相談ネットワーク、日本食が欲しいメンバーに届ける仕組み、日本語でネット上でグループ会話できる仕組み、会員の地域別サポート等です。(後略)」とA会としての具体的な取り組みの方向性を会の運営者として述べている。

7) 【会の役割：日本人ネットを活用した情報交換の活性化と促進】

これは、〈高齢者にまつわる病や健康法、社会動向、将来予測、社会保障、死のこと、ケアホームやその設立について、在住日本人シニアの意識調査など、日本人ネットワークを活かして、時には世代を超えて、自分たちのために情報発信、情報交換、情報共有している〉であった。

会長は「会のメンバー達はお互いに助け合うことこそ、年老いて精神身体共に、ひ弱になっていく我々にとって最も大切なことではないでしょうか。そのためには情報交換です。読者の声を十分に利用なさって下さい」と訴えかけている。あるワーキンググループメンバーから「ケアホームの設立運営を管理する団体も増えてきましたが、こうした社会福祉分野に利潤追求の企業や金融事業が介入するほど大きな市場になりつつある現状が問題視されるようになってきた」ことや、会員へのアンケート結果として「老後に欲しい公共サービスとして、63%がみんなが集まれる場所で、55%が日本人向けケアホームを希望していた」と運営者側から会員に情報提供をしている。

V. 考察

本研究の目的は、A会に属する日本からの英国永住者が、慢性障害が生じる老年期を豊かに過ごすためにどのように考え取り組んでいるのか、彼らの健康の視点を明らかにすることである。以下、A会の英国永住者の慢性障害に備える健康の視点の特徴とケアについて考察する。

結果の老いることへの思いで、ある会員はイギリスでの生活の影響は、異文化への適応度合い、英国社会への溶け込み具合、イギリスでの立場を列挙して述べているが、これらは渡英した時から始まる異文化への適応であり、金本(2009)が指

摘する自文化を両立させてきた過程が老年期に再度焦点が向けられることを支持する結果であった。英国社会に十二分に溶け込んだとしても、これらの影響によって、老年期には再度どのように受け入れられているかが懸念材料になることを示している。

A会の英国永住者の健康の視点として**自己の保全**が導かれた。永住者が英国社会の中で英国民らとの関わりがあり、かつ、その中で自分が有意味であると感じられること、その中で自己実現できることへの価値が語られていた。自己の保全は、正木(2008)が明らかにした高齢者側の文化的視点として「人との関わり」に該当し「孤独ではないという意味合いのつながり」や、「役に立っているあるいは互いに支え合っている」という内容と類似している。**自己の保全**は高齢者の健康の視点において普遍的な要素であると考えられた。

次に健康の視点として**老いへの自己対処**が導かれた。正木(2008)は、高齢者の健康の文化的視点として、「健康・経済の安定」を示している。これは、安定した現在の健康状態の維持と経済的基盤の安定を指している。**老いへの自己対処**には健康の自己管理が表現されており、老いに伴う健康問題への対処や健康維持というものは、当然の健康の視点と言える。

自己の保全、老いへの自己対処による取り組みは、**家族・近隣と溶け合い望む生活に近づける経験**によって培われた**英国での気概**が基盤となっていた。自分にとっては新しい老いと、英国において、という事象に対して、自文化との両立過程の経験を持ち込んで向き合っていると解釈できた。金本(2009)が、自文化を両立させてきた過程が、老いとともにもそこに回帰していくことを指摘しているが、再度向き合うとともに、自文化との両立の経験が助けになっており、支援するには鍵となる高齢者の力であると考えられた。

その他、本研究では**英国での安心の老後環境**として自らの健康管理と日本を感じられるケアを受けられることが健康の視点として明らかになった。ここで、つながりを感じているものは日本語、日本食を通した日本であった。西田(2013)は、複数

の文化を経験する高齢者の健康の視点として、人生で身につけてきたつながりを感じているものを共有できる人や場を示している。その意味でA会によるデイケアの実施は、共有できる人や場になっていると考えられた。正木(2008)の高齢者の健康を捉える文化的視点では「大いなるものの感受」が示されており、それは、自然とのつながりや、家族や土地とのつながり、伝統とのつながりとして表されている。英国永住者には、生まれ育った土地から離れているため土地や伝統といった内容は得られない。しかし、同じ境遇の永住者から、または日本語や日本食から、日本の土地、伝統といったものに思いを馳せ偲んでいるのかもしれない。文化ケアを考える上で英国においてどのようなつながりが得られるか調査が必要と考える。

A会という共同体に醸成された健康の視点として、会の目指す方向、会の役割があった。複数文化を経験する者が永住先の国で慢性障害に備えるためには、個人の力では補いきれない側面があり、会が司って推進していると推察される。ここから複数文化を経験した者の健康には、共同体の活動が文化ケアの享受に影響しうると考えられ、文化ケアの促進には、共同体の目指す健康を理解し協働する者が必要と考えた。世界の文化ケアの焦点は対象者の文化を理解する視点で述べられ、文化両立の過程という視点は不足していると考えた。現在、地域住民のそばで、住民の暮らしに出向き、住民とともに看護活動を展開し、年齢・疾病・障害の有無・経済的な事情を問わず総合的かつ日常的に地域住民にかかわるコミュニティナースという存在がある(香本, 2017)。共同体と共に活動するコミュニティナースのような存在は、文化両立の過程を意識しつつ個人と共同体の健康に寄与できると考えた。今後、世界、日本においてコミュニティナースの確立が望まれる。

VI. 結論

本研究は、A会に属する日本からの英国永移住者の慢性障害に備える健康の視点について、A会の機関紙から質的に明らかにした。結果、健康の

視点は、英国で老いることの思いに端を発し、英国で身につけた気概を基盤に自己保全と老いへの自己対処といった英国で培ってきた個人の力による対処の側面と、英国での安心の老後環境のイメージを基盤に会の目指す方向と会の役割の醸成という会の力による対処の側面で行き届かせるものであった。自己の保全、自己対処は高齢者に普遍的な健康の視点と考えられた。安心の老後環境のイメージには、日本とつながれるものが重要であり複数文化を経験する高齢者に特徴的なことと思われた。日本とのつながりが得られにくい永住者にとって、健康は共同体の影響を受けやすいと考えられたことから、自文化の両立の過程を意識しつつ、個人の健康と共同体の健康を包含して看ることができるコミュニティナースの存在が今後望まれると考えられた。

VII. 研究の限界

本研究結果は、A会に属さない英国永住者の健康の視点は明らかにしていない。会に属するかいなかによって取り組み方は異なると考えられ、会に属さない者についても今後調査が必要と考える。機関紙からのみの調査であったので、さらなる健康の視点がある可能性もあるので、今後さらに調査が必要である。

機関紙の内容に投稿者の年代は記載されていない。会の構成員の多くは高齢者であるが、厳密に何歳台の者からの投稿であるかは判別不能である。そのため考察で引用した論文と本研究の集団が完全に一致していない可能性も捨てきれない。その点で本研究の考察は限定的なものと考えべきである。

VIII. 利益相反

本研究における利益相反は存在しない。

IX. 謝辞

本研究のデータ収集に協力したA会の会長に心より感謝する。本研究は「だいいびーてつく」の助成を受けて実施した。本研究は第38回日本看護科学学会学術集会で発表した内容に加筆修正を

したものである。

引用文献

Keiko Ito. (2001): *The Japanese Community in Pre-War Britain: From integration to disintegration*. Curzon.

伊藤喜典(2016): イギリスの高齢者介護費用負担制度の改革-責任と公平を巡る17年間の議論-. 海外社会保障研究, 193, 54-68.

英国日本人会 (2019年4月3日). About Us.

<http://japanassociation.org.uk/about/>

独立行政法人労働政策研究・研修機構(2018年1月8日). 主要国の外国人労働者受入れ動向:イギリス.

https://www.jil.go.jp/foreign/labor_system/2015_01/uk.html#list_04

金本伊津子(2014): 日本人のグローバル・マイグレーションの今: イギリスにおける日本人の高齢化に関する意識調査 (1). 桃山学院大学総合研究所紀要, 40(1), 1-24.

金本伊津子(2009): 長期にわたる異文化接触による文化変容. 桃山学院大学総合研究所紀要, 34(3), 53-60.

香本なぎさ (2017): 看護職の新しい働き方を創造地域を元気にする“コミュニティナース” - コミュニティナースの自活モデルづくりに向けて. コミュニティケア, 19 (5), 66-68.

外務省領事局政策課 (2019年1月7日). 海外在留邦人数調査統計平成28年度要約版.

<https://www.mofa.go.jp/mofaj/files/000162700.pdf>

正木治恵, 山本信子 (2008): 高齢者の健康を捉える文化的視点に関する文献検討. 老年看護学, 13(1), 95-104.

西田伸枝, 田所良之, 谷本真理子, 正木治恵 (2013): 在日コリアン高齢者1世における文化を尊重したデイサービスの意味. 文化看護学会誌, 5(1), 12-19.

Mandeleine M Leininger (1992/1995). 稲盛文昭 (監訳) 他, レイニンガー看護論-文化ケアの多様性と普遍性. 医学書院.

Treas, J. (2015): Incorporating immigrants: Integrating theoretical frameworks of adaptation. *Journals of Gerontology - Series B Psychological Sciences and Social Sciences*, 70(2), 269-278.

Treas, J., & Mazumdar, S. (2002): Older people in America's immigrant families: Dilemmas of dependence, integration, and isolation. *Journal of Aging Studies*, 16, 243-258.

山浦晴夫(2017). クラシックGTとKJ法およびそれに準拠した質的統合法(KJ法)の比較. 看護研究, 50(3), 218-227.

Health views on preparing for chronic geriatric disorders held by permanent UK residents from Japan belonging to peer support group A: Pilot study based on group newsletters

Yoshiyuki Takahashi
Toho University

The objective of this study was to determine the health views on preparing for chronic geriatric disorders held by permanent residents of the UK from Japan who were members of peer support group A. A qualitative analysis was performed based on 15 of group's newsletters that address the challenges of old age. The results indicated the member's views on health, which arose from their thoughts of aging in the UK, comprised aspects that included coping by virtue of personal strengths cultivated while in the UK, such as self-maintenance and self-coping with aging based on strong resolve acquired in the UK. There were also aspects that involved coping through the strength derived from the peer support group, such as developing the group's aims and roles based on what the members considered to be an environment that would provide a sense of security. Self-maintenance and self-coping were concluded to be universal aspects of the health views of the elderly individuals. Connection to Japan appeared to be important for an environment that would provide a sense of security for elderly individuals and characteristic of individuals who had experienced more than one culture. The analysis indicated that the elderly individuals became refocused on accommodating both the host culture and their own native culture. It would therefore be desirable to employ community nurses who can focus on accommodating the strong resolve acquired in the UK and the individual's own culture and thereby reach out to both the individuals and the community.

Key words health views, old age, chronic disorders, UK, permanent residents